

〔書評〕

## 木村 一信著『昭和作家の〈南洋行〉』

森本 穫

本書を読みすすむ中で、私は今から十二年前の、同じ著者の文章をしきりに思い出していた。

それは若谷信和・上田博・木村一信編著『作家のアジア体験』（世界思想社 一九九二年）である。木村氏はこの書で「アジア・東南アジアとの関わり——序にかえて」と「阿部知二 インドネシアへの旅」の二つの文章を担当していたばかりだが、今村昌平監督の映画「女術」を軸として、「収奪対象としてのアジア・東南アジア」ととらえる日本人の視点のゆがみを的確に指摘していたからである。

氏はこうしたアジア観が、すでに岩倉具視使節団（明治十二）や福沢諭吉の「脱亜論」に発しており、日清日露の両戦争を経て大東亜戦争に至って最大に肥大膨張した跡を簡潔に整理した上で、次のような問題を提起していた。

「ひるがえって、現代日本の状況はどうであろうか」と。そこから「近代において実際にアジア・東南アジアの国々を訪れた十人の作家」を選び、彼等の〈体験〉や〈文章〉としての結実のあと

を探ろうとしたのがその書であった。こうした作家たちのアジア・東南アジアの旅を通して、「現代におけるアジア・東南アジアと私たちとの関わり」を考えるための一助としたい、と氏はその書の目的を記して文章を結んでいた。

それから十二年たって刊行された本書は、持続する精神が、いかに多くのものを学び得るかを、恐ろしいまでに語っている。

\*

\*

本書は「昭和」期の作家たちの、戦争や動乱といった不安定な時代の、社会における言説や行動を眺めてみたいと企図したものであって、「南洋行」とは、ゆるやかなそらした「南」の地域への視線、移動などの意として用いている。

この複雑多岐にわたる課題にこたえるために、本書は五つの章から成っている。第I章「〈南洋行〉の時代」は、「高見順〈南洋行〉序説—心はちちに乱れて」、高見順「ある晴れた日に」論—

バリ島体験の意味」、「中島敦の〈南洋行〉——新たな己れへの認識」、「石川達三「蒼氓」論——〈棄民〉を目にして」の四編。いわゆるアジア太平洋戦争以前に、みずからの意志で南の外地へわたった作家たちについて語った章である。

第Ⅱ章「〈徴用〉の時代」は、文字どおりアジア太平洋戦争において徴用された作家たちを論じたもの。

「阿部知二の〈徴用〉体験——「死の花」の背景」、「高見順の〈徴用〉体験——私はビルマを愛してゐる」、「北原武夫の〈徴用〉体験——薔薇を描くこと」、「庄野英二の〈ジャワ〉——青春の消光」、「『南方徴用作家』——〈ジャワ〉を中心に」、「阿部知二の〈ジャワ〉を歩く」の六編を取める。次の第Ⅲ章とともに本書の中核部分をなしている、とっていいだろう。

第Ⅲ章「〈南方〉への関わり」は、やや視線の角度を変えて、近代作家のアジア・東南アジア認識についてさまざまに論じたもの。

「近代作家のアジア・東南アジア認識について」、「消えた『虹』——佐藤春夫の〈南方〉体験と関東大震災」、「流浪の旅の豊饒さ——金子光晴「マレー蘭印紀行」」、「持統と変貌と——中島敦をめぐって」、「ハンセン病医〈ジャワ〉に死す——邑栗慎一論」、「漫画家の〈ジャワ〉——小野佐世男をめぐって」、「敗戦を受けとめる——火野葦平「革命前後」」、「統治地〈ジャワ〉の愛——安田満「歌姫アユム」の八編が取められている。第Ⅱ章の補完をなす重要な問題が論じられている。

第Ⅳ章「〈外地〉への目」は、さらに角度を変えて「外地」をどのように文学者たちが見て、考え、行動し、書いたかを見つめたもの。「〈ジャワ〉の陣中新聞「赤道報」『うなばら』」、「大東亜共栄圏」と文学者たち」、「文学者の戦争責任五〇年」、「自己認識・生存認識」に關わるアジア体験の四編が取められている。

第Ⅴ章「研究の現在」は、ここ十年ほどの間に著者の執筆した書評など、比較的短い文章が五編集められている。「阿部知二の問題意識——「人の発見」、「旅人」の誕生まで——森本穂「阿部知二——原郷への旅——」、「アジアの描かれ方——川村湊「アジアという鏡——極東の近代——」、「歴史への臨場感」を手にするために——黒川創編「〈外地〉の日本語文学選——」、「新しい文学史の誕生——池田浩士「海外進出文学」論・序説」の五編であるが、おのずから著者の関心のあり方、問題意識が鏡のように反映して、本書のテーマを補っている。

\*

\*

本書は以上のような魅力にみちた論考の集成であるが、ここでは、本書においていちばん多く論じられている阿部知二を中心に、特に印象的なくつかの点について述べてみたい。章立ての枠をはずして、自由に書いてみよう。

およそ一年にわたる〈徴用〉を終えて帰国した阿部が最初に活字にしたのは「週刊少国民」に載せた「ジャワの林檎」であった。

幾度もの失敗や苦心を重ねた末に、熱帯地方における林檎栽培に成功した「一人のオランダ人農場主」のことを、阿部は帰国第一声として語ったのである。それから四年余りのち、阿部の徴用体験を最初に作品化した小説、すなわち（ジャワもの）の嚆矢である「死の花」に登場させたのも、この農場主であった。

著者はこの事実に着目して「それほど阿部を捉えていたものは何であったか」と自問する。そして第一に、阿部のオランダに対する親近感をあげる。すでに長編「旅人」において日蘭関係史の研究に携わる若者と、その遺志をついで研究をつづけようとする恋人のことを書いていた阿部は、自分が蘭印に行くことになった暗合に驚き、それがいつそうオランダ人に対する好意となつてあらわれたのではないかと著者は推測するのである。

第二の理由として著者は、英文学を学んだ阿部の、自らの学問や文学の拠つて立つ基盤としてのヨーロッパへの憧れが底流していたと指摘する。

第三に、阿部の市民的正義感。阿部の接触したオランダ人たちは日本軍の占領によつて窮境にあつた。英語のできる軍属である阿部は、彼らのおかれた状況に同情し、ヒューマニズムあるいは市民的正義感から、保身と矛盾する方向に微力ながら力をつくそうとした、と想像するのである。

阿部は後年、自筆年譜の昭和十七年の項に「南海の美しさと戦争のいとわしさと、心を乱した」と記した。阿部の（ジャワもの）には、南海の花々の芳烈な香りと女たちの美しさへの驚嘆と、

「吾汝」「後ろめたさ」が共存している。著者はその点を繰り返し本書の中で掘り下げるのである。

今ひとつ印象的なのは、二十編ちかい（ジャワもの）の中でも特異な位置を占める「二つの死」（『中央公論』昭和28・4）である。ここには、二人の日本人が取り上げられる。

一つの死は、邑楽（池尻）慎二。ハンセン病医師として苦闘していた彼は二度応召し、三度目は軍属としてジャワの癩研究所の所員として「南方の病者たち」の救済に全力を傾けていたが、偶然にも朝鮮人警備員たちの叛乱の中で流弾に斃れたのである。文芸面でも名のあつた彼の死は、まことに悲劇的なものだった。阿部は「非業の死」をとげた「五味」（邑楽）に「真の殉教者の姿」を見ている。

もう一つの死は、市来龍夫である。

市来は、早くからジャワに来ていて、日本軍のなかで事情通として重い役割を占めていたのであるが、日本の思惑がインドネシアの独立にあるのではなく、資源や人力の調達に真の意図があることに気づき、軍政監部に批判的な態度を取つて行く。そして敗戦後は、インドネシア独立運動に身を投じ、オランダ軍と闘つて死んでゆくのである。

市来をモデルにした「加世」について阿部は「加世は全身をアジアの解放に捧げていたのであり、私は『文化的』なコスモポリタニズムの徒であつたに過ぎない」と書いている。

前述の「南海の自然の美しさと戦争のいとわしさと、心を乱

した」は、こうした苦い反省を含む、重い言葉であつたらう。

ジャワで味わたつた、かねてから憧れの「西洋との出会い」、官能に訴える放恣な生活、南方の自然のもたらす至福などとともに、一方では支配、統治する側の一員として否応なしに体験せざるを得ないことがあつた。現実に対する、自らの心情としてのヒューマニズムとのジレンマ、無力感。(ジャワもの)の登場人物たちは、こうしたジレンマのうちにいることの「苦洪」を嘔みしめている。

これに対して一つの結論を出したのが「二つの死」であつた。自分の「苦洪」などをはるかに凌ぐ苦しみを経験しながらも、なおインドネシアの人々を愛し、インドネシアの地で斃れた実在の二人の日本人を描き出して、みずからの「苦洪」「後ろめたさ」をきびしく相対化しようとするところに、阿部の決意があつた。「この数年間のおのれの生活の中の苦洪の正体を突きつめること」から阿部の戦後の(ジャワもの)は書き出された、と著者は述べるのである。

「阿部知二の問題意識——『人の発見』も、印象に残る文章である。これは日本文芸家協会がアジア太平洋戦争の反省文を冒頭に掲げた機関誌『文学会議』に阿部の書いた文章をとりあげたものである。

阿部は戦争末期、上海の聖セント、ジョージズ約翰大学で文学の講義をしていた。おそらくその最後の授業で阿部の話した内容が紹介されているのだが、ナポレオンが老いたゲーテと対話したあと「そこに人間が

いる」と言つた。阿部はそのエピソードを紹介し、「文学をするということとは、『人を発見した』と、どこかの誰かにつぶやかしめるような人間になることだ」と話を結んでいるという。

著者はそこから、阿部が微用中に発見した「人間」を想像する。古文書館で出会つたオランダ人学者、林檎の栽培を成功させた実業家、インドネシア独立戦争に身を投じて生涯を終えた市来龍夫、ハンセン病医としてジャワに赴任し、非業の死をとげた邑楽(池尻)慎……。阿部が戦争で見たものについてこのように書く著者は、最後に、現代の人々に対して次のような言葉を語りかける。「戦争が終わつて五〇年余りという時間は、こうした戦地・戦場を体験し、それを綴つた文学者たちの言説を歴史的に、客観的に捉えることを可能にしたと言えよう。私たちの前には、歴史認識としてアジア太平洋戦争下の文学的営為を理解することが課題として課されている。」

本書の内容は、この要請に十分答えているばかりでなく、さらなる決意を読者に求めていると思われる。

(二〇〇四年四月 世界思想社 三九四頁)

本体価格六八〇〇円)

(もりもと おさむ 賢明女子学院短期大学教授)